資料からも大内峠に茶屋があったことは確認できたが、大内集落においても茶屋の存在は語り継がれていた。

本事業により峠の茶屋跡の発掘調査を実施したところ、茶屋跡からは建物礎石とともに陶器片や古銭等の遺物も多数出土した。

峠の茶屋は、礎石の配置から同一場所に初期の建物と時を経た建物の二棟が存在し、初期の建物が桁行六間、梁行四間半であるのに対し、後期の建物は桁行・梁行ともに三間半となり、初期建物の西北側に建てられていた。

下野街道は、寛永二十年（一六四三）に保科正之の会津入部とともに参勤通行の主要街道として盛んに使われるが、天和三年（一六八三）の五十里湖出現により、街道は寸断されその機能を失っている。災害後においても会津と南山を結ぶこの大内峠区間は人の往来もあったろうが、参勤交代や会津藩の廻米が他の街道へと移っていることから、年間の通行人数は減ったことに間違いはない。通行人の減少はそのまま茶屋経営を危機に陥れたものであったろうから、よって、初期の茶屋人は大内峠を下りる結果となったのではないだろうか。また、時代を降りた建物については、文政十年（一八二七）四月の藩主下向の際の建物である可能性が強いと思われた。

出土遺物は、陶器片を主として古銭や戊辰戦争の際の銃弾も出土している。陶器片の年代推定から、茶屋は明治の初めまで営まれていたと判断された。